

藤原登著

『神社本庁は原点に立ち戻れ』

創立以来の危機にある「神社本庁」の過去と未来

斎藤吉久（宗教ジャーナリスト、元「神社新報」編集長代行）



著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

本格的な懷疑はそれである。本庁設立を呼びかけた葦津珍彦

本書のなかに、葦津珍彦という人物が取り上げられている。「戦後唯一の神道思想家」と呼ばれている。紀元節復活、靖国神社国家護持、劍璽御動座復古、元号法定などに中心的な役割を果たした。著作は五十冊以上。来年は没後三十年となる。

いまから七十有余年前、神社本庁創設の中心にいたのも葦津だった。敗色濃厚となった大戦末期、「敗戦となり、外国軍隊の占領を招けば、古来の民族宗教は危殆に瀕する。全国神社の力を結集しなければ国難は乗り切れない」と呼びかけたことが始まりだった。

大戦後の中国大陸では、チベット仏教への迫害、弾圧、殺戮が起きた。いまウイグルで、香港で、同様のことが起きている。敗戦後の日本でも起きた。それほど神道が敵視されていた。根拠となる事実の当否はともかく、勝者に楯突く力は敗者にはない。

葦津らが東奔西走し、昭和二十一年二月、皇典講究所、大日本神祇会、神宮奉斎会の民間三団体が糾合し、宗教法人神社本庁は設立された。装束を着た神職の団体ではない。そこが重要だった。初代事務総長は内務官僚だった宮川宗徳で、宮川は翌年創刊の神社新報初代社長ともなった。葦津は編集主幹兼社長代行者となった。

しかし苦難の占領期も過ぎ、半世紀以上が経ち、庁舎も代々木に移った。職員顔ぶれも一変し、葦津や宮川のような「背広の神道人」は見かけなくなつた。神職の同業者組合と揶揄する人さえいる。当然、意識も変わったのだろう。そして、本書が指摘するような閉鎖社会の悪弊が頻出することとなったのではないか。日本の神社には宗教指導者はいない。教義もない。布教という概念もない。だからこそ神社本庁は葦津が主張する「連盟方式」を採用した。「神社教」の教義を立て、中央集権的組織を作れば、かえって占領軍の思う壺となる。危機は避けられ、神社は守られた。

ギルド社会の殻を破るためには

しかし宗教法人は所詮、下駄ではなく、革靴だった。キリスト教風の教義、教師、教会がないのが日本の神社のはずなのに、神社は、そして神社本庁は、文字通り、上位下達の宗教法人化していったのだろう。革靴に馴染んで、自家撞着の罫にはまったのである。

これから先、自浄作用が期待できないなら、何が起

きるのか。たとえば力士集団の相撲協会は監督官庁の文科省の指導を受け、ガバナンスの整備を進めているという。神社本庁はどうだろうか。政教分離の壁があるとはいえ、間接的な行政介入があり得るのだろうか。

もしそうなれば、いわゆる靖国問題なども一気に解決へ向かう可能性はある。ただし、いまの神社人たちが期待する方向とはまったく逆の方向となるのではないか。敷蛇である。そうなることを望まないなら、自己改革するほかはない。そのためには著者が訴えるように、設立の原点に立ち返り、ギルド社会の殻をみずから破るほかはない。

別に難しいことはない。神社周辺に眠っている有能な人材を活用することである。今回の訴訟では、社外出身の弁護士も関わっている。隠れた人材を積極的に登用することだ。そうでは

ければ、日本人の信仰を守ってきたはずの神社本庁が、日本の歴史と伝統の息の根を止める皮肉な結果を招く。神々の味方が神敵となる。それこそ開闢以来の危機である。

蛇足だが、今年六月、葦津珍彦の命日に友人知人を誘って、奥津城に詣でた。雲ひとつない快晴のもと、墓前に手向けられた花々がひととき輝いていた。故人は花木を愛でる繊細さを持ち合わせていた。その葦津が今日の神社界を見たらどうだろう。自然の美しさを愛でる日本人の素直な感性が求められているのではないか。

（敬語敬称略）

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

著者は神職でも、神道学者でもない。市井の人である。独学で神道を学び、この十年、二十年、神社本庁をめぐると不快な諸問題に深い憤りを覚え、民族系団体の媒体に連載が始まり、そして今回、一冊の本にまとめ上げられた。このことこそ、本書が取り上げている本庁職舎転売・職員地位確認訴訟にとって、もつとも重要なことである。

神本本庁は原点に立ち戻れ

崩壊は必至！

崩壊は必至！

崩壊は必至！

崩壊は必至！

崩壊は必至！

崩壊は必至！